

かずさの博物誌

アオサギ(青鷺)

乾田化耐忍サギ

文・写真／成田篤彦



©成田篤彦



©成田篤彦

▲アオサギのヒナ
鷺山の一番高い位置に巣が作られていた

先年の初夏に以前訪れたサギの集団繁殖地(鷺山)を見に行ったら。しかし、サギはどこにもいなかった。愛鳥家の友人に鷺山のありかを聞いて、再度、探しに行った。鷺山は大きな堰の対岸の丘の斜面に出来ていて、麓には新しい宅地が造られていた。鷺山はシイやカシの黄色の若葉で覆われ、それぞれの樹木の頂にダイサギやチュウサギ、コサギ、アマサギなどの巣があちこちにあり、ヒナが育っていた。親サギたちがひっ

▲アオサギ サギ科
かずさの干潟、河川、湿田で見られる

「幣袋」(角川書店編一九七九『図説俳句大歳時記夏』角川書店)という有名な句があるが、この句は広い水辺にアオサギがいる涼しげで美しい風景をよく捉えている。カメラを向けたのに気づいたのか「グア、グア」と鳴きながら首を縮めて足を水平に伸ばし、河川の上空をゆったりと飛び

きりなしに巣へ行き交い、ヒナの鳴き声で騒々しかった。アオサギは鷺山の一番高い位置に大きな巣を作っていた。彼らは巣造りの場所として一等地を選んでるように思った。アオサギのヒナは羽根が生えそろい巣上で元気よく羽ばたいていた。電線が写らない場所を探していると日焼けをした三〇代の方が「毎年、来るのですか?」と話しかけてきた。「ここには初めて来ました。」と答えると、「この鷺山は以前、別の場所にあったのが、何回か場所を変え、ここに移ってきた。」と教えてくれた。環境がどんどん変化するので彼らも繁殖地を移動させたのであろうか? さて、昨年の秋、河口付近の岸辺でアオサギが葦原に隠れて魚を狙っていた。そのうち、ゆっくりと歩いて葦原から流れに出て来た。背面が青灰色をしていて、首が長くスマートで大きい。この姿かたちや水際にいることからしばしば鶴に間違えられる。

夕風や水青鷺の脛をうつ 蕪村
「幣袋」(角川書店編一九七九『図説俳句大歳時記夏』角川書店)という有名な句があるが、この句は広い水辺にアオサギがいる涼しげで美しい風景をよく捉えている。カメラを向けたのに気づいたのか「グア、グア」と鳴きながら首を縮めて足を水平に伸ばし、河川の上空をゆったりと飛び

去った。飛んでいる姿も優雅なのが、残念なことこの鳴き声それぞれを艶消しにする。
ところで、一九八〇年代まではかずさでもアオサギはあまり見られなかったが、この頃は干潟や河川や谷津田などでドジョウやフナを飲み込んでいる姿をしばしば見かけるようになった。この間は湿田で大きなウシガエル(食用ガエル)を何度かつまみなおして飲み込んでいた。「あんなに大きいのによく呑み込めるな」と感心したし、「味がわかるのだろうか?」と余計な心配をしたほどであった。「ずいぶん増えたのでは?」と素人なりに感じていた。鳥の生態に詳しい友人が言うには「アオサギは増えている。」という。その理由の一つに「夜も活動して、冬期、乾田を動き回る野ネズミをばくりと飲み込んでしまう。その姿を想像するとちよっと気持ち悪いでしょ。」と話してくれた。サギの仲間だから、「水生動物しか食べないのか」と思い込んでいたが、アオサギは無下の悪食。小魚、甲殻類、昆虫類はもとよりカエル、ヘビ、ネズミ、モグラまで動くものなら見境がない(北川捷康一九七六『アオサギ』静岡県の自然四季の野鳥 静岡新聞社)という。多くの水田が冬期に乾田化し、コサギやチュウサギなどが減っていると言われている中で、アオサギはその影響を受けないで、むしろ増加傾向にあるらしい。さしずめ、アオサギは乾田化耐忍サギと言えようか。



©成田篤彦

▲飛行するアオサギ
「グア、グア」と鳴きながらゆったりと飛んでいた